

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究 (10)

——1960年代 (その4) ——

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1, 第2, 第3, 第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代, 1920年代, 1930年代, 1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、なし、そしてそれにつづいて、本誌第6巻第1, 第2, 第3号では1960年代に海外において発表された諸研究の一部としてE.ホイッターカー, W.フェルナー, O. H. テイラー, A. K. ダース・グプタ, M. ブラウグの研究の内容を整理する試みをなした。本稿は、前稿にひきつづき、1960年代に海外で発表されかつわたくしがみることでできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究のうちの一部, F. ベーレンズ, J. オウザー, P. L. ダナーの所論を整理しようとするものである*。

* 諸研究の発表年度の区分は、本稿にさきだつ諸稿におけるのと同様、著書の場合には、その原版もしくは初版が出版された年度に、あるいはその最初の著作権が成立した年度に、したがった。ただし、本稿で使用した文献は、必ずしも原版、初版のものではない。また、学位論文であるダナーの研究の発表年度は、その論文が学位論文として承認された年度とした。

(1) F. ベーレンズ (1962)

まず、ベーレンズは、つぎのような見解を示している。

① スミスは、彼の分業論に、富はもはや自分の労働の生産物に存するのではなくてその生産物と交換されうる他人の労働の量に存するのだという発見を、結びつけ、そして、「したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited……by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library <New York: Random House, 1937>——以下 W. N. と略記する——, p. 30. 大河内一男監訳『国富論』<全3巻>, 中央公論社, 1976年, <I>——以下、大河内訳<I>と略記する、ただし、本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——, 52ページ。)としている。

② しかしながら、スミスにおいては、価値についての二つの異な¹⁾たし²⁾かも互いに調和させることのできない把握が、併存しており、商品の生産に必要な労働量による商品価値の規定と、「それをもって商品を買うことができるところの生きている労働の量による、または同じことであるが、それをもって一定量の生きている労働を買うことができるところの商品の量による」商品価値の規定とが、混同されている(Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert: Vierter Band des „Kapitals“*, Erster Teil <in: Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 26, Erster Teil, 5. Aufl.> <Berlin: Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, 1976——1. Aufl., 1965——>——以下 Marx, *Mehrwert* <I>と略記する——, S. 41. 大内兵衛, 細川嘉六監訳『剰余価値学説史<『資本論』第4巻>』第1分冊<『マルクス=エンゲルス全集』第26巻第1分

冊><1965年版の訳, 大月書店, 1969年>, 50ページ。)。それゆえ, マルクスの指摘しているように, スミスは, 労働量による商品の価値の規定を, 労働の交換価値によるすなわち賃金による価値の規定と混同している。なぜなら, 賃金は, 「一定量の生きている労働で買われる商品の量に等しく, あるいは, 一定量の商品で買うことのできる労働の量に等しい」からである (Marx, *Mehrwert <I>*, S. 41. 前掲訳書, 50ページ。)。だが, 労働の価値——あるいはヨリ正確には, 労働力の価値——は, 「他の諸商品の価値から特別に」区別される点はない, それゆえ, スミスは, 一商品の価値を, 他商品の原因にまた度量標準にしているのである。スミスは——別の言葉でではあるが——, すべての商品の価値を, 一商品すなわち労働力の価値に, 依存させるのである。したがって彼は, 価値を価値によって規定することによって, 一つの悪循環をおかしているのである (Marx, *Mehrwert <I>*, S. 42. 前掲訳書, 50ページ⁴⁾。)

③また他方でスミスは——別の言葉でではあるが——, 現在では——資本主義的商品生産のもとでは——ある一定量のすでに対象化された労働はヨリ大きな量の生きている労働と交換される, ということを発見したのであるが, それがもとで彼は, 「労働条件が土地所有と資本との形態で賃労働者と対立するようになれば, もはや労働時間は, 諸商品の交換価値を規制する内在的尺度ではなくなるということ」 (Marx, *Mehrwert <I>*, S. 44. 前掲訳書, 53ページ⁵⁾。) を, 結論するのであった。

1) なお, ベーレンズによれば, スミスがそのようにすることによって, 生産者の生産物のなかに対象化された労働が事実上, すべての他の生産物中に対象化された労働と同一視されそして商品のなかに含まれている社会的労働としての労働を規定することとなった, とされる。Fritz Behrens, *Grundriss der Geschichte der politischen Ökonomie*, Band 1, *Die politische Ökonomie bis zur bürgerlichen Klassik*, 2., berichtigte und ergänzte Aufl. (Berlin: Akademie-Verlag, 1981——1. Aufl., 1962——)——以下 Behrens [1962] と略記する——, S. 211.

2) Behrens [1962], S. 211-212.

3) ベーレンズによれば, そのことの原因は, スミスをして資本の歴史的特性およびその範疇と法則を理解することを妨げているところのスミスの体系のなかにある

矛盾にある、とされる。Behrens [1962], S. 212. このことに関するスミスの体系のなかにある矛盾については、Behrens [1962], S. 209-211 を見よ。

- 4) Behrens [1962], S. 212. なお、ベーレンズは、この悪循環の原因はスミスの基本的な考え方のなかに、すなわち、彼の階級的性格の結果として生じている彼の理論の観念論的・形而上学的な基本的考え方のなかに存在する、とし、さらに、このことに関連してつぎのような説明をくわえている。すなわち、「[かりに、すべての労働者が商品生産者であり、単に自分たちの商品を生産するだけでなく、それを売りもすると仮定しよう] (Marx, *Mehrwert* <I>, S. 42. 前掲訳書, 51ページ。)。その場合、] すべての商品がその価値どおりに、したがって、そのなかに含まれている必要労働時間どおりに売られるならば、「そのときには、労働者は、12時間労働の生産物である一商品をもって、他の一商品の形態での12時間労働を、すなわち他の一使用価値に実現されている12時間労働を、再び買うのである」(Marx, *Mehrwert* <I>, S. 42. 前掲訳書, 51ページ。)。したがって、労働者の「労働の価値」は、「彼の商品の価値」に等しい、そして、交換をつうじて、商品の価値ではなくて使用価値の姿だけが変えられるのである。それゆえ、はじめは、対象化された労働の等量が交換され、つぎには、一定量の生きている労働が、等量の対象化された労働と交換されるのである。スミスは彼の分析において、すべての労働者が商品生産者でありまたそれゆえすべての生産者は商品所持者としてのみ相対するといった仮定から、出発した。この前提のもとでは——すなわち、単純商品生産という前提のもとでは、なぜなら、まさしく明らかに、その前提は、すべての生産者が商品生産者として相対するといったこと以上のことを意味しないのであるから——、マルクスの言っているように、「労働の価値」は、「商品に含まれている労働量とまったく同じように、商品の価値の尺度として通用し」えた (Marx, *Mehrwert* <I>, S. 43. 前掲訳書, 52ページ。)。したがって、スミスは、前資本主義時代における商品の価値規定の真実を、提供しているのである。Behrens [1962], S. 212-213.
- 5) Behrens [1962], S. 213. このことについてベーレンズはつぎのような説明をしている。すなわち、スミスにとって単純商品生産の立場からは真実だと思われることが、資本主義的商品生産の立場からは彼にははっきりしないものとなる。すなわち、「言いかえれば、彼にとって単純商品の立場では真実だと思われることが、単純商品に代わって、資本、賃労働、地代等々のいっそう高度で複雑な諸形態が現われてくるやいなや、彼にははっきりしなくなるのである。このことを彼はこう表現する。すなわち、商品の価値がそれにふくまれている労働時間によって測られたのは、人間がまだ資本家、賃労働者、土地所有者、借地農業者、高利貸等々としてではなく、ただ単純な商品生産者および商品交換者として相対していたにすぎなかった市民階級の失われた楽園においてである、と。」(Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie* <in: *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 13, 2., durchgesehene

AufI. > <Berlin: Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, 1964——1. Aufl., 1961——>, S. 44-45. 大内兵衛, 細川嘉六監訳『経済学批判』<『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻><1961年版の訳, 大月書店, 1964年>, 44ページ。) スミスは, 資本と賃労働との交換では, 「一般的法則が直ちに廃棄されて, 諸商品は……それらが表わす労働量に比例して交換されない」ということを発見した。現在では生産の対象的諸条件が一方の階級に属し, 労働力は他方の階級に属する。「労働の生産物またはこの生産物の価値は, 労働者のものではない」のである。スミスは——別の言葉ではあるが——, 現在では——資本主義的商品生産のもとでは——, ある一定量のすでに対象化された労働はより大きな量の生きている労働と交換される, ということを発見した。そこで彼は, 「労働条件が土地所有と資本との形態で賃労働と対立するようになれば, もはや労働時間は, 諸商品の交換価値を規制する内在的尺度ではなくなるということ」を, 結論するのであった (Marx, *Mehrwert* <I>, S. 43-44. 前掲訳書, 52-53ページ。)。Behrens [1962], S. 213.

さらにベーレンズはつぎのような説明をくわえている。すなわち, 一方での単純商品生産における商品の商品に対する交換, 他方での資本主義的商品生産における商品の商品に対する交換のこの矛盾を, スミスは, 解決することができなかった。彼は, 自分の労働が自分自身の生産物のなかに対象化されている生産者たちが相対し, 生産者たちが自分自身の労働の量としての価値を等しい量の他人の労働と交換するときに, 価値法則は通用するだけである, と推定した。そして, 外見上, 直接の生産者が彼らの生産手段から離脱することは, この法則の廃棄へと導くこととなるのである。スミスは, 価値を歴史的に生成した一つの生産関係として把握しなかったために, また, 階級的に制約を受けた彼の基本的な考え方そのものを理解することができなかったために, この矛盾を解決することができなかったのである。Behrens [1962], S. 213-214.

なお, ベーレンズは, スミスの議論には生産に必要な労働の量による価値規定, 支配しうる生きている労働の量による価値規定 (賃金による価値規定) とならんで, 第三の価値規定すなわち分配から価値を演繹しようとする企てといったものが存在するとして, それについての検討をなしている。それについては Behrens [1962], S. 214-216 を見よ。

(2) J.オウザー (1963)

つぎに, オウザーは, 1963年に初版が出版された彼の著書のなかでスミスの議論を取り扱うさい, 「価値」という項においておおむねつぎのような見方を示している。

①スミスによれば価値には使用価値と交換価値という二種類の価値があるのであるが、そのうちの交換価値、すなわち、商品の所有がもたらすところの他財貨にたいする購買力が、市場経済が発達して以来、経済学⁶⁾の中心的な問題の一つであってきた。

②スミスの議論では商品の交換価値を決定するものは、その商品が真に費やさせるもの、すなわち、たんに貨幣ではなくて、「それを獲得する労苦と骨折り」であった。そして、これを測定するもの、すべての商品の「交換」価値の真の尺度となるものは、労働⁷⁾なのであった。

③しかしながらスミスは、労働の質には相違があるため仕事のむづかしさや労働が行われるさいの熟練や創意に対するしんしゃくがくわえられなければならないとし、そしてこの問題に対して、「市場のかけひきや交渉」⁸⁾がそれらの相違を調整する、とした。

④だがたとえこの労働の質の相違という問題はおくとしても、労働価値説には生産における資本の投資という困難な問題があるのであり、⁹⁾資本の成長が単純な労働価値説を無効にしまうであろうということを理解していたスミスは、「資本^{ストック}の蓄積と土地の占有にさきだつ初期末開の社会状態において」のみ、諸商品が、それらを生産するのに必要とされる労働量に比例して交換されるとし、そして、資本投資が見過せないこととなりまた土地が私有財産になった社会では諸商品の価格は賃金、利潤および地代をまかなうものになるとした。諸商品の真実価値はもはやそれらの商品に含まれている労働によっては測定されえないのである。しかしながら、それらは、「それらの各々が購買または支配しうる労働量」によって測られる。商品が買うことのできる労働の量は、利潤と地代の分だけ、その商品の生産に投下された労働の量を超過するのである。¹⁰⁾

⑤ところで、もしスミスにしたがって我々が一商品とその商品が購買するであろう労働との間にひとつの均等関係を組み立てるならば、我々は、その均等関係を裏返し、そして、労働の価値はその労働が購買するであろう諸商品によって測定されると言うことができる。ある意味で、価値につ

いてのスミスの定義は、国民の福祉 (well-being) の国際比較に利用される。すなわち、もし合衆国の一労働者が5時間の労働で1足の靴を買うことができ、他方ソ連邦ではそれは20時間の労働を要するとすれば、このことは、ひとつの意味のある比較となるのである。¹¹⁾

6) Jacob Oser, *The Evolution of Economic Thought* (New York: Harcourt, Brace & World, 1963)——以下 Oser [1963] と略記する——, p. 53.

7) Oser [1963], pp. 53-54. なお, W. C. ブランチフィールドとの共著の形で出版されている第3版では、この箇所はおおむねつぎのような形で叙述されている。すなわち、商品の交換価値を決定するものは何か。たんに貨幣のタームでだけでなくその商品を獲得する労苦と骨折りというタームでもその商品が真に費やさせるものである。労働とはやっかいなものであり、可能なかぎりできるだけ回避されるであろう。富は人をして、労苦と骨折りを他の人々に課することによってそれらを回避することを可能にする。それゆえ、スミスによれば、それを所有しているがそれを他の諸商品と交換したいと思っている人にとってのそのようなすべての商品の価値は、「その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」のである。Jacob Oser and William C. Blanchfield, *The Evolution of Economic Thought*, 3rd ed. (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1975), p. 73.

8) Oser [1963], p. 54.

9) それについてのオウザーの説明については、Oser [1963], p. 54 を見よ。

10) Oser [1963], p. 54.

11) Oser [1963], pp. 54-55. なお、上掲の第3版ではこの部分は削除されている。

また、オウザーは、いま本文で見た指摘につづいて、スミスによれば需要は諸商品の価値に影響を及ぼさないのであり、賃金、利潤および地代からなる生産費のみが長期において価値を決定するのである、ということを指摘し、さらにそのようなものとしてのスミスの議論に対して若干の論評をくわえている。それについては、Oser [1963], p. 55 を見よ。

なお、以上でみてきたオウザーの所論においては、スミスの議論における「交換価値の決定の問題」と「交換価値の測定の問題」との論理的関係といったことは必ずしも明らかな形では示されていない。だが、オウザー自身は、スミスの議論では「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」においては商品の生産に「投下された労働量」によってその商品の交換価値が決定されるとともにその商品の交換価値が測定され、しかもその「投下された労働量」はその商品が「購買しうる労働量」に等しいとされており、それにたいし、資本の蓄積と土地の占有の

行われる社会状態では商品の交換価値は「投下された労働量」によって決定されるのではなく、長期的には賃金、利潤および地代からなるその商品の生産費によって決定され、他方その商品の交換価値はその商品が「購買しうる労働量」によって測定されるとされている、とみているともいえるであろう。

(3) P.L.ダナー (1964)

最後に、ダナーは、つぎのような見方を示している。

①「諸商品の exchangeable value (交換価値) を規制する原理を究明するために、私はつとめて次の諸点を明らかにしようと思う。」「第一に、この exchangeable value (交換価値) の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか」と『国富論』第1篇第4章の終わりのところ (W.N., p. 28. 大河内訳<1>, 50ページ。) で述べられているように、価値についてのスミスの議論には、¹²⁾ 価値の、ある絶対的な標準^{スタンダード}の追求ということが含まれていた。

②ところで、スミスの価値理論の背景となった諸価値理論を検討してみると、¹³⁾ 一つの価値理論は、究極的には、(1)価値とは本来なんであるか、(2)価値の諸原因とはなんであるのか、(3)価値の尺度とはなんであるのか、という三つの関連のある質問に対する解答ということに帰着するのであるが、これらの質問にアプローチするさい現代人は、哲学的な諸問題を回避して、道徳的、心理学的、社会学的諸問題を含めて多数の前・経済学の問題を与件として取り扱ったり、あるいはそれらを無視、除外する傾向があるのにたいし、¹⁴⁾ スミスはまさにそれらの問題にたずさわったのであり、彼は価値を、経済学的な観点からというよりも彼の社会哲学の観点から、考えたのであった。そしてまた、そのような一社会哲学者としての彼のアプローチは、経済的連関の厚生にかかわる諸局面からのものであったのであった。ただし、スミスの場合、このような関心は、いっぽうで、彼の分析のなかに、価値を有する事物と価値そのものとの混同をもたらすことともなり、かくして、商品の原因が価値の原因となり、また、〔商品の量 (したがって価値の大きさ) と、商品の原因 (したがって価値の原因) といった形

で] 価値の尺度が価値の原因と関連づけられることとなった。そして、このような意味で、価値についてのスミスの問題のたてかたは明確性を欠くものとなったのである。¹⁵⁾

③スミスの問題のとらえかたにはそのような難点があるとはいえ、とにかくスミスはいっぽうで、exchangeable value の、ある絶対的な標準^{スタンダード}を追求していた。そして、スミスにおいては、フィートあるいは歩幅が長さに関する距離の自然的な尺度であるのとちょうど同じように、労働が exchangeable value の自然的な尺度であるのであった。なお、その場合の労働とは、生産力といったことを意味していたわけでも、エネルギーの支出あるいは時間の経過といったようななんらかの物理的な要素を意味していたわけでもなく、労働の不効用、労苦、骨折り、人の安楽と幸福の犠牲といった純粹に心理的なものを意味していたのであり、¹⁶⁾ この意味での労働が、すべての事物の究極的な費用であるとともにすべての事物の真の尺度である、とされるのであった。¹⁷⁾ スミスにおいては、exchangeable value とは、労働に対する支配力を与える物質的な生産物の一性質であったのであり、exchangeable value を有する物質的な生産物が支配するもの、その生産物の所有者が他者に移転させることができるものは、労働の不効用であったのであり、またそれゆえ、その exchangeable value の究極的な尺度は、労働の心理的費用、労働の労苦と骨折り、つまり、労働の不効用であったのである。¹⁸⁾

④ところで、スミスによれば、労働がいかに根本的で本質的なものであるとはいえ、労働の熟練、訓練状態、厄介さ等々の相違がおびただしいためにある特定量の労働がそのまま標準として用いられうるというわけではなかったのである。そしてこの問題にたいしてスミスは、「市場のかけひきや交渉」をつうじて、日常の業務をしていくには十分なほどの、うえの諸相違についてのおおざっぱな釣り合いや評価、相対的な価格の一覧表——スミスでさえ、価格から脱出することができなかった——がもたらされる、とした。すなわち、スミスは、労働の不効用を基数的な意味で確定するこ

とは認めはしなかったのであるが、「市場のかけひきや交渉」にしたがってのおおよその序数的な意味での確定を認めたのである。¹⁹⁾

⑤また、スミスは、彼における経済的発展の基本的な原理であった分業化 (specialization) と機械の導入がある所与の量の労働が実行しうる生産率を必然的に変えてしまうであろうということを、事実上、認識していたのではあるが、その場合彼は、労働の価値が変化するのではなく労働と交換されうるものの価値が変化するのであると考えた。²⁰⁾ スミスは、人間は生存や生活のために必要な物質的事物を手に入れるためにみずからの力を犠牲にするのでありそしてこれが究極の費用なのであるという究極的な経済的現実²¹⁾に、注目しているものであり、労働の不効用は、それと交換されるものの多少にかかわらず、つねに同一であり、労働の不効用こそが究極的な価値尺度である、と考えているのである。

⑥このようにスミスは労働の不効用を究極的な真のそして普遍的な価値尺度と考えたのであるが、労働不効用とははっきりしたものではなくそれを測定するには多くの困難が伴うということからスミスは、ヨリ実用的かつ通常的な価値尺度を、おのおのの時と場所において受け入れることができるような形で生活を維持するのに必要な主要食物という観点からみた場合の正常な報酬という意味での、労働の維持費に、求めた。このようにして、スミスにとっては、食物の主要品目としての穀物が〔つまり、ある一定量の労働の維持のための穀物量が〕ヨリ良い尺度ということになるのであり、そしてその理由は、穀物は労働の不効用よりも規格的な取り扱いを受けやすいものであるとともに長期にわたっては一つの標準として相対的に安定的なものでありつづけるということであった。しかしながら、それでも、スミスは、穀物を主要品目とする食物という点からの労働の維持費、生計費は、異時点間においても異場所間においても可変的である、²²⁾ということを認めていたのであった。

⑦なお、スミスが最低限の住や衣を含めた全体としての最低限の生活水準ではなくて食物を標準としたのは、住や衣といった項目がいかに必要な

ものであるとしても、それらの項目は経済状態の良好な時期および劣悪な時期をつうじて食物よりもはるかに多くの変動にさらされやすい、ということによるのであった。²³⁾

⑧他方、スミスは、銀の量は年から年にかけてはそれほど大きくは変動しないということから、比較的短い期間にわたっては標準的な通貨単位としての銀が、穀物よりも良好な価値の尺度であるかもしれない、ということをも認めた。しかしながら、長期では銀の稀少あるいは豊富はヨリ大きな変動にさらされる、とするのであった (W. N., pp. 36-37, 210-211. 大河内訳²⁴⁾ < I >, 62—63ページ, 342—344ページ)。

⑨このようにスミスは、労働の不効用を測定することの困難性ということから短期については銀を、長期については〔ある一定量の労働の維持のための穀物量という意味での〕労働の維持費、生計費を、ヨリ実際のな尺度としてもち出すのであるが、同時にスミスは、労働は穀物でも銀でも変動的な賃金を受け取るであろうということをも認めるのである。しかしスミスは、このことは労働の価値の変動を指し示しているのではなく、穀物のまた銀の価値の変動を、それらのものの相対的豊富さおよび稀少さの変動を指し示しているのであるということをも強調するのである。スミスにおいては、²⁵⁾ 価値の本当の尺度、あらゆるものの究極の費用は、労働の不効用なのである。労働は、実用的な尺度としてはいかに不適切なものであろうとも、真の価値尺度なのであり、そして、長期では穀物がまた短期では銀がヨリ便利な尺度ではあるけれども、それらのものが究極的に指し示すものそしてそれらのものの究極の基準となっているものは、労働に伴う余暇の犠牲および骨折りなのである。労働の維持費、銀の購買力は変動するかもしれない、²⁶⁾ だが、労働の不効用はけっして変動しないのである。

- 12) Peter Lyn Danner, *An Inquiry into the Social Aspects of Adam Smith's Theory of Value*, Diss. Syracuse University 1964, ©1965 (Ann Arbor, Michigan: Xerox University Microfilms, 1976)——以下 Danner [1964] と略記する——, pp. 168-169. なお、ダナーは、つぎのような指摘をくわえている。すなわち、スミスは、いま本文で引用された文章にみられるように、「諸商品の exchangeable

value (交換価値) の真の尺度はなんであるか」ということと「すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか」ということを同一視している。こんにち、どんな商品も、その exchange value (交換価値) の尺度は、その商品を獲得するのに引き渡されなければならない購買力の大きさであるように、どんなものの尺度も、そのものにとっては外在的なものなのである。すなわち、価値とは、ひとつの相対的なもの、他のすべての財貨にたいする一財貨の交換比率なのである。ところが、スミスにとっては、「真の尺度」、「真実価格」とは、それにてらしてすべての商品が測定されうるところのある一つの永続的で絶対的なものであるとともに、それはまた、一つの原因に関する道すじにおいても、商品と結びつけられるものなのである。Danner [1964], p. 169.

なお、スミスのこのような態度に比較しての現代の経済学者たちの価値の取り扱いおよびマルサス、リカードウ、マルクスの取り扱いについてのダナーの見解については、Danner [1964], pp. 169-178 を見よ。

13) それについては、Danner [1964], pp. 178-185 を見よ。

14) このような態度をとる現代のアプローチがそれら三つの質問にたいして与えている解答についてのダナーの説明については、Danner [1964], pp. 185-186 を見よ。

15) Danner [1964], pp. 185-187. 本稿注12も見よ。なお、ダナーは、価値についてのスミスの理論はスミスの経済分析を彼の社会哲学に関連づけるさいに軸軸的な役割を演じるのであり、そして、exchangeable value (交換価値) についてのスミスの議論は、たとえそれが経済学的にはどんなに混乱したものであったとしても、スミスが商業的自由主義の諸原理を明確に表現するさいにあるはっきりとした役割を演じていた、とみるのであった。Danner [1964], pp. 171, 187, 201-202.

なお、ダナーは、スミスのいう exchangeable value (交換価値) という用語にかなり特徴的な解釈を与えている。以下において、それを見ておくこととする。

ダナーは、スミスのいう exchangeable value という用語に関してつぎのような見方を示している。

(1) まず、スミスは、value in exchange および exchange value というもっと通常の用語をよく知っていたはずであるにもかかわらず、exchange value という用語は非常にまれにしか用いず、また、value in exchange については、価値のパラドックスにおいてなん回か value in use (使用価値) と対比させているが、価値のパラドックスにつづくパラグラフ、それにつづく第5章での議論さらに一般に『国富論』をつうじて exchangeable value という用語のほうを好んで用いている。このこと自体は、語法上の一つの特徴であるにすぎないかもしれない。だが、その対照的な用法はきわだったものであり、また、スミスがこの exchangeable value という用語を好んで用いているということは、スミスの考えへの一つの根本的な手がかりを与えるものであるかもしれない。というのは、exchangeable value とは、字

義どうりにとれば、たんに、value in exchange と同じものを意味しているわけではないからである。後者は、たとえば交換において5個のリンゴは2個のオレンジに値するといったように、交換のプロセスにおいてまた交換のプロセスから発生するある値うちもしくは評価を含意しているのであって、その場合、厳密に言えば、価値が等しいがゆえに価値そのものが交換されるというわけではないのである。それにたいし、exchangeable value とは、交換されることのできる価値のことを言っているのである。すなわち、スミスは、厳密な意味での価値について語っているのではなくて価値を有する事物あるいは価値を有する商品という不精確な意味での価値について語っている、ように思えるのである。Danner [1964], pp. 187-188.

(2) あいにくスミスは、彼が exchangeable value によって何を意味したのかということ を 正確には定義してはいない。しかし、『国富論』のなかで示されている exchangeable value 概念に関係する諸断片をあつめて考えてみれば（これについては、Danner [1964], pp. 188-190 を見よ。）、スミスの exchangeable value 概念に関してつぎのような点を指摘することができる。

(2-i) スミスにおける exchangeable value とは、触知することができた相対的永続性をもつ物質的な事物のひとつの性質である。すなわち、①スミスの exchangeable value 概念における最も基本的な要素は、exchangeable value とは、物質的な事物に内在する性質である、ということである。②なお、スミスは、exchangeable value における相対的な要素を否定しているわけではない。というのは、スミスは、exchangeable value は他の諸商品に対する支配力をまた究極的には他の諸商品を生産するのに必要な労働支出に対する支配力を与えるということ を、主張しているからである。したがって、exchangeable value は、諸商品間のある比率もしくは関係を、確立するのである。③しかし、スミスは、この比率そのものには、それほど多く注意を向けているわけではなく、それよりはむしろ、その関係が構築されている土台に、すなわち、物質的な事物に内在する性質に、注意を向けるのである。④この性質は、一方では効用すなわち諸欲望を満足させる能力ということである。他方では、スミスにおいてはより重視される点であるが、永続性 (permanence) ということである。すなわち、生活にとって有用なある物を生産するさいにひとたび労働が物質的な事物のうえに支出されると、その労働は、労働の支出が終わってしまったあとでも存続する永続的な事物のかたちで、固定されつづけるのである。スミスにおける exchangeable value とは、触知することができた相対的永続性をもつ物質的な事物がもつところの、欲望を満足させる力およびその力の永続性という性質のことなのである。Danner [1964], pp. 190-191.

(2-ii) スミスにおいては、exchangeable value とは、他の生産要素の力をかりた労働によって原料のなかになんらかの永続的な仕方で固定される性質、永続的な欲望充足力という性質、のことなのであるが、スミスは、物質のなかにこのような

性質を固定させる労働を生産的労働とよび、他方、たとえばオペラ歌手のサービスのように物質のなかにこのような性質を固定させることなく労働の支出とともに欲望充足力が消え去ってしまう労働を不生産的労働とよんで、それらを区別するのであった。Danner [1964], pp. 190, 191-192, 253.

(2-iii) 他方、スミスにおける exchangeable value はまた、ある真の純生産物という意味を含んでいた。すなわち、①スミスにおいては、exchangeable value は、総額では、「一国の住民の真の富と収入」としてあらわれるのであったのであり、そしてそこでは、リカードウにおけるのとはちがって、ひとつの資本ストックとしての富 (wealth) と、富あるいは労働からのひとつのフローもしくは所得としての収入 (revenue) との間の明確な区別といったことはなされてはいなかった。その理由は、スミスの意味では富も収入もともに exchangeable value をもつ、ということにあったのである。スミスは富という用語を、一人当たり所得あるいは収入、また、資本財の一ストック、という二つの異なる道すじにおいて用いており、そしてスミスは、exchangeable value の永続性ということに注目していたというまさしくこの理由のゆえに、富という用語をそのような二つの異なる道すじで用いることにたいしてはなんの当惑をも表わしはしなかったのである。②したがって、年々の生産物のうち、生産的労働を維持するためにかあるいは資本ストックを置き換えもしくは増加させるためにか使用される部分は、追加的な exchangeable value をもたらし、自らを再生産さらに増殖させるのであり、他方、企業家たち地主たちによって彼らの地位に要する必要物をこえての生計に支出される部分、不生産的労働に支出されるものは、たとえそれがどれほど必要なものあるいは品位を高めるものであろうとも、自らを再生産しないことによって、exchangeable value を破壊するのであったのであり、そしてスミスにとって重大なことは、この商品とあの商品との交換関係といったことや労働と生産物との間の交換関係といったことではなく、一国の住民たちがそれから、また、それによって、生活の必需品、便益品および贅沢品を手に入れるところのストックあるいはフローの純増加ということであったのである。Danner [1964], pp. 189, 191, 192-193. [なお、ダナーは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「それゆえ、資本が増減するたびに、勤勉の実際の量、すなわち生産的働き手の数は自然に増減する傾向があり、またしたがって、その国の土地と労働の年々の生産物の exchangeable value、その国の全住民の真の富と収入は、自然に増減する傾向がある。」(W. N., p. 321. 大河内訳<I>、528ページ。傍点の付されている部分は、ダナーが強調のアンダーラインを付している部分。) Danner [1964], p. 192. また、ダナーによれば、リカードウにおいては富 (riches) と価値とは別のものであったのにたいし、スミスにおいては、それら二つのものはほとんど同じものであった、すなわち、スミスにおいては一国民は exchangeable value の大きさに応じて、生活の必需品および便益品をもたらし労働にたいするその

国民の支配力に応じて、富んでいたりあるいは貧しかったりするるのである、とされる。Danner [1964], p. 175.]

- 16) ダナーは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものということができる。……彼の熟練と技能が普通の程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。」(W. N., p. 33. 大河内訳< I >, 57ページ。) Danner [1964], p. 194. またダナーは他の箇所でつぎのような叙述をしている。すなわち、『『それ自身の価値においてけって変動することなく、それだけが、すべての商品の価値を時と場所のいかに問わず評価し比較することのできる究極で真の標準である』(W. N., p. 33. 大河内訳< I >, 58ページ。) ところの、労働者にとっての労苦と骨折れ。』Danner [1964], p. 189.
- 17) なお、ダナーによれば、スミスの議論では、この意味で、生産的労働も不生産的労働もともに、価値があるのであり〔なお、ダナーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「これら(不生産的労働)のうちで最も下賤な者の労働も一定の価値をもつのであって、この価値は、他のあらゆる種類の労働の価値を規制するのと同じ原理によって規制される。」(W. N., p. 315. 大河内訳< I >, 518ページ。()内はダナー。)], 労苦と骨折れという同じ自然的費用を伴うのであり、したがってまたそれらの労働はともに報酬を与えられなければならないということになっている、とされる。Danner [1964], p. 194, p. 194n. 51.
- 18) Danner [1964], pp. 101, 193-194, 253. なお、ダナーによれば、スミスの議論では、exchangeable value は、労働が価格付けの対象となる唯一の生産要素であるといった未開社会においてのみ、体化された労働の不効用に等しいのであり、それにたいしすべての発達した経済においては土地と資本が生産に貢献するだけでなく報酬を与えられもするのであって、そしてこの全体としての報酬は、順次他の諸財貨に体化されるより多量の労働の不効用を、支配することができる、ということになっている、とされる。Danner [1964], p. 101.
- 19) Danner [1964], pp. 101, 194.
- 20) ダナーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「彼(労働者)が支払う代価は、それと引き換えに受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。……変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。」(W. N., p. 33. 大河内訳< I >, 57-58ページ。()内はダナー。) Danner [1964], p. 195 n. 53.
- 21) Danner [1964], pp. 194-195. なお、ダナーは、満足の量は物的生産物の量におおよそ比例するであろうということをスミスが仮定していたということに留意しておくことが重要であるがそれにくわえて、スミスは労働不効用の量を価値の一原因としてではなく価値の一尺度として考えていたのだということに留意しておくこと

も重要である、とし、そのことに関して、本誌第4巻第4号でみたH.ミントの研究にふれつつ、説明をなしている。その説明の内容はおおむねつぎのようなものであるといえよう。すなわち、スミスは物的生産物の量と満足の量との間のおおよその比例ということを仮定している。しかし、労働の不効用が「産出のなかに含まれている主観的な社会的所得の尺度」であるということをミントが否定するとき、ミントは、スミスの議論における原因としての労働と尺度としての労働との間の相違ということを忘れてるように思える。「600単位の労働が1,000単位の賃金財を生産することができる」というふうに述べることは、スミスの考えをリカードウ的投下労働といった型へともっていくことであって、これはまったくのところスミスの考えていたことではなかったように思える。スミスの場合、その1,000単位の生産物の原因は、労働の不効用ではなくて、土地および資本とともに労働の生産性なのである、そして、物的生産物の量と満足の大きさはおおそ比例するのであり、その生産物の価値は、その生産物が「その生産物の量とおおよそ比例する満足が」、不変なものである労働不効用をどれだけ支配できるかということによって、測られるのである。このような意味において、労働の不効用は主観的な社会的所得の一尺度なのである。なお、賃金率そのものは、労働の生産性や分配に伴う他のすべての要因に応じて変動するであろう、しかしながらその場合には、労働の不効用が変動しているのではなくて、不変なものである労働の不効用が、より多くの財貨と「また、それにおおよそ比例するより多くの満足と」あるいはより少ない財貨と「また、それにおおよそ比例するより少ない満足と」交換されているにすぎないのである。労働の不効用が、究極的な真のそして普遍的な尺度であるのである。Danner [1964], pp. 195-196.

- 22) Danner [1964], pp. 196-197, 253. なお、ダナーは、最後の点についてつぎのような説明をくわえている。すなわち、スミスは、労働は貧しい国におけるよりも富んだ国におけるほうが通常より豊かな食物をもって報いられるという点で富んだ国と貧しい国との間には相違があるということを、同様に、標準的な食事は「自然的に、……それらの国々が前進しつつあるか、停滞しているか、あるいは衰退的であるかによって、規制される」(W. N., 190. 大河内訳<I>, 313ページ。)ということ、を、認めている。事実、スミスは、その量および構成の両面において小作人あるいは労働者の食事を、経済的進歩の相対的狀態についての一つの重要な基準にしているのである。すなわち、富んだ経済であろうと貧しい経済であろうととにかく成長しつつある経済では主要食物という点からみた労働の報酬は停滞的な経済におけるよりも高いであろうし、また、停滞的な経済におけるほうが衰退的な経済におけるよりも高いであろう、というのである。事実、スミスは明確に、繁栄ということ、を、必需品が豊富で贅沢品が稀少であるような経済状態として定義し、窮乏の時期はその逆の状態であると定義しているのである (W. N., p. 190. 大河内訳<I>,

315ページ。Danner [1964], pp. 196-197.

- 23) Danner [1964], p. 197. なお、ダナーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「国の人口密度は、その国の生産物が衣と住をまかないうる人口数に比例するのではなく、それが食物を供しうる人口数に比例するものである。食物さえ得られるなら、必要な衣と住を見つけるのは簡単なことである。」(W. N. p. 163. 大河内訳< I >, 272ページ)「それゆえ、われわれは、以上すべての理由から、いかなる社会状態、いかなる改良〔ダナーが引用している文では発展 (development) となっているが、スミスの原典では改良 (improvement) となっている〕の段階にあっても、等量の穀物は他のいかなる等量の土地の原生産物よりも、いっそうよく等量の労働を代表し、また等量の労働に対応することになるであろうということを安んじて確信してよいであろう。したがって穀物は……他のどんな商品、どんな商品群よりも正確な価値の尺度なのである。」(W. N., p. 187. 大河内訳< I >, 309ページ。〔 〕内は中川。) Danner [1964], p. 197.

- 24) Danner [1964], p. 198.

- 25) なお、ダナーは、この脈絡のなかで、スミスの議論ではさらに、労働の市場価格が労働の自然価格から乖離するといったことは一時的なものであって、それは供給と需要の局所的な事情によるものであり、市場価格は結局のところ、自然価格へとひきつけられまたつねに自然価格を中心にして変動することになるとされている、という指摘をなしている。Danner [1964], p. 198.

- 26) Danner [1964], pp. 198, 253. なお、ダナーによれば、スミスの議論においては、労働は、それなくしてはいかなる exchangeable value も生産されえないという意味で、独特なものであるけれども、スミスは、リカードウやマルクスがそうであるという意味での労働価値論者ではなかったのであり、その点ではむしろ生産費価値論者というほうが適しているであろう、とされる。スミスの議論における exchangeable value の源泉としての労働についてのダナーによる検討については、Danner [1964], pp. 95, 101, 199-202, 253 を見よ。

結 び に 代 え て

以上、「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する F. ベーレンズ, J. オウザー, P. L. ダナーの所論をみてきた。

以下では、それらの所論の特徴等に関して、若干の点を示しておくこととする。

まず、ベーレンズがスミスの議論における価値尺度を問題にするとき、

それは、事実上、諸商品の交換価値を規制しその大きさを内在的に測定する内在的尺度として問題にされたのであるが、ベーレンズによれば、スミスは一方でそのような意味での尺度を労働時間に求めるのであるが、そのさいスミスは、「商品に対象化された労働量」と「商品によって支配されうる生きている労働の量」とを混同し、したがって労働量による価値の規定を、論理的には悪循環をおかすものである賃金による価値の規定と混同するとともに、さらに他方でスミスは、事実上の資本主義的商品生産のもとではうえの二つの労働量は一致しないということから、労働時間が諸商品の交換価値を規制する内在的尺度として妥当するのは単純商品生産のもとにおいてのみであり、資本主義的商品生産のもとではもはやそれは妥当しないと考えていた、とされるのであった。

つぎに、オウザーの所論においては、スミスの議論における「交換価値の決定の問題」と「交換価値の測定の問題」とのあいだの関係といったことについてのオウザーの見方ということは、必ずしも明らかな形では示されてはいなかったのではあるが、そこで示されているオウザーの論述からして、オウザー自身は、スミスの議論では「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」においては財貨の生産に「投下された労働量」によって、当該財貨の所有がもたらす他財貨に対する購買力としてのその財貨の交換価値が、決定されるとともに、その財貨の交換価値が測定され、しかもその「投下された労働量」はその財貨が「購買しうる労働量」に等しいとされており、それにたいし、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態では財貨の交換価値は「投下された労働量」によって決定されるのではなく、長期的には賃金、利潤および地代からなるその財貨の生産費によって決定され、他方その財貨の交換価値はその財貨が「購買しうる労働量」によって測定されるとされている、とみているともいえるのであった。

最後に、スミスを経済学者としてよりもむしろ社会哲学者としてとらえるダナーによれば、スミスは、厚生にかかわる諸局面から経済、価値の問題にアプローチしたことから、価値を有する事物と価値そのものとを混

同することとなり、価値についてのスミスの問題のとらえかたは明確性を欠くものとなった、とされるのであるが、ダナーのみるところでは、スミスが考察の対象とした *exchangeable value* (交換価値) とは、諸商品間の (交換) 比率といったことを一つの要素として含むものではあったけれども、なによりもそれは、触知することができた相対的永続性をそなえた物質的事物に内在する欲望充足力およびその充足力の永続性という性質、その所有者に、他財貨に対する支配力を、そして究極的には財貨の生産に必要な労働に対する支配力を与えるところの、物質的事物の性質のことなのであったのであり、そして、そのような性質を有する物的生産物の増加は *exchangeable value* の増加ということになるのであった。そして、ダナーによれば、スミスは価値についての彼の議論の一部としてこのような意味での *exchangeable value* の尺度を追求したのであるが、そこにおいてスミスは、労働に伴う労苦と骨折り、安楽と幸福の犠牲といったものがすべての事物の究極的な費用であるとともにそのような労働不効用は不変なものであると考え、また、*exchangeable value* を有する物質的な生産物が支配するもの、その生産物の所有者が他者に移転させることができるものは、そのような労苦と骨折り、安楽と幸福の犠牲であると考えることによって、生産物の *exchangeable value* の究極の尺度を、(生産物の、したがってまた生産物の *exchangeable value* の、重要な一原因としての労働の生産性ではなく、) その生産物が支配することのできる労働の不効用に、求めた、とされるのであった。そしてまたダナーによれば、スミスは労働の質の相違という問題に対しては、「市場のかけひきや交渉」ということをもち出すのであるが、そこでは、スミスは労働の不効用の序数的な意味での確定ということを考えていたのである、とみられるのであった。さらにまたダナーによれば、労働の不効用を確定することの困難性ということからスミスはより実用的な尺度として、短期については銀を、長期についてはある一定量の労働の維持のための穀物量という労働の維持費を、提示した、とされるのであった。しかしまた、ダナーによれば、スミ

スの議論では、そのような労働の維持費も銀の購買力も可変的なものであるのにたいし労働の不効用は不変なものであったのであり、また、それら二つのヨリ実用的な尺度が究極的に指し示すもの、そしてそれらの尺度の究極の基準となっているものは、労働の不効用であった、つまり、それら二つのヨリ実用的な尺度の、尺度としての成功の程度は、究極的には、それらの尺度がどの程度において、不変な労働不効用を反映することのできる時間的および空間的に安定した尺度でありうるか、ということにかかっているのであって、スミスの議論では、労働の不効用は、たとえ実用的な尺度ではないとしても、すべての事物の究極的な費用そして真の価値尺度であったのである、とされるのであった。